

筑豊の黒旗

（昭和十一年）

（昭和十一年）

（昭和十一年）

終戦―筑豊へ

一九四五年十一月、戦争生き残りの私は焼けただれた東京へ舞い戻ったものの、住む家も失ない戦前住んでいた焼跡の防空壕を寝ぐらしとし、二カ月余りブラブラしていた。その間、家族の行方を求めて八方手をつくしたが、遂に消息をつかめず、一応見切りをつけ、あとは気長に朗報を待つ気になった。たまたま、今後自己の生甲斐として、末端労働者の実態を見きわめるため炭坑行を決心していたので、思い切って住み慣れた東京を後にした。

途中、名古屋に下車。ここも焼野原であったが、駅や主要な部分はアメリカさんが残しておいた。幸いにして母の家は焼け残り、母も無事であった。母、じゃう七十四歳、私、二郎四十歳。

母は私の顔を見るなり、仏壇に灯明をつけ念仏を始めた。私も母の気持を汲み本心ならずもその後座った。

母の最初の言葉は「よう生きてりゃーたなァー」だった。この言葉が持つ意味は、私にとって感慨無量だ。

名古屋滞在五日、その間に聞かされた話の中に、私の消息が不明だといって、警察が母を責めること、再々、ブタ箱へ泊められたこともあったという。私が戦地へ行った事がわかるまでは、母はずいぶん私の思想のために苦しめられたそう。その母が「おみゃさん達がいう自由な世の中になった。何でも好きなことをやったらええ」と結び、私の炭坑行を理解した。

最初、母が「これからどうしやあす？」というから、炭坑行きの決心を打明けると、さすがに驚いて「いくら何でも、前科者しか行かん炭坑へ行かんでもよかるうが……」となげいた。当時、一般の認識は、炭坑といえはこの世の地獄絵図であつたろう。母は度々私を引止めようと試みたが、私はこれから自分が進もうとする労働運動について、くりかえし説明し納得してもらつた。戦前の母は、私の思想を訳もわからずきらっていたが、親の情愛は常に変らなかつた。官界や教育畑にいる姉や兄に会つたらと、母はすすめてくれたが、私は彼等が相変わらず私を異端者扱いするだろうと思ひ、会うのを止めた。そのとき弟はまだ帰還せず支那の奥地で生死のほど不明であつた。

いよいよ九州へ出発の日、「そのうち、子供達も生きとりやここへ連絡するだろう。警察ももうわしをブタ箱へ放り込むこともにやーだろうでよ。人のためになる事だつたら何でも

やるさ。からだだけは氣をつけてなあ」と言いながら、貴重な薬用アルコールを一本くれた。母の言葉は、私にとって何よりの饒別であつた。

私が博多へ着いたのは十一月末日だ。博多駅から住吉神社の先にある、麻生鋳業の案内所まで、人力車で乗りつけたので、係員が驚いていた。案内所という看板は掲げていても、昔風の桂庵（口入屋）で、爆撃をまぬがれた普通の家に、机一コと椅子二、三脚を置き、壁に坑口名と地図が張つてある。そこで型通りの紹介状をもらつて、教えられた汽車に乗り、上山田線碓井駅に着く。秋の陽は沈むに早く、碓井駅に着いた時は真暗で、ただ一つ出札口のハダカ電球が、遠くまで光を放っていた。くらやみの中で声を掛けられた男について吉隈坑の飯場へ着く。ここは百ワットもあろうか電球がまばゆい。

後で知つたが、私をここまで案内した男は、稲見梶男という大納屋育ちの若者で、本職は坑口捲方、二十四歳。彼は親も縁者もない孤独だ。後日、私は彼の仲人をするようになるが私を炭坑に落付かせたのも、私を組合長に担ぎあげたのも彼である。私もまた彼を知的にリードした（現在の彼は全鋳連の重鎮である）。

第一步を印した飯場（まもなく食堂と呼ぶようになる）で出された食事にまた、印象が残

る。軍隊式のアルマイトの丼に、米と大豆七分三分の山盛り、同じくアルマイトの皿に、切干大根の煮付けと漬物（大根漬五センチ位のぶつ切一コ）私は米のところを一口して箸を置く。味は良かったが、量的にうんざり。二口目の箸を取ろうとしていたとき、近くのストーブを取り巻いていた連中の中から「そのメシ、残ったら下さい」という男があった。私は箸をつけるのをやめて、その男に食糧を全部やった。

稲見の話によると、この男は山崎と言って、ドマグレ（仕事をせざるまけること）ばかりしていて、食堂へ来ては、人の残飯をあさるという。当時は、炭坑でも働かない者には規定の配給だけで、アメリカからの援助によるベーコンや砂糖が米に換算されて、やっと二四〇〇カロリーを保つ状態であった。野草は勿論、さつま芋の茎まで食糧にした時代だ。炭坑夫になる人の大部分は住居も職も失くした都市生活者か、生き残りの復員者だった。しかし私は餓えてはいなかった。軍から持って帰った罐詰も幾つか残っていたし、母から貰ってきた食糧、アルコール、衣類等何一つ不自由してはいなかった。

私の部屋は稲見と同居に決められた。稲見はいわゆるボスで、私が来る迄は六畳一間を独占していた。私が入山（炭坑夫として鉱業所へ入ること）した当時は、まだ住宅も整理つか

ず、捕虜収容所の跡や、朝鮮人が住んでいた納屋の改装最中であつた。私の居室も、一棟八戸の棟割り長屋を独身寮に改装した一室にすぎない。この寮は四畳半には三人、六畳は四、五人と決められていたが、稲見は口さがない坑員達を尻目に、六畳を独占していたのだ。しかし稲見といえども、労務係に何時までも逆らう事の不利を知っていたようで、私をどのよう to 評価したのか、自分の部屋へ同居さすことで労務と妥協したらしい。

それから四十日ほど、稲見は捲方、私は坑内夫として同室に暮したが、その間に私は稲見から、炭坑独特の言葉や風習を教えられた。私もまた、稲見に総ゆる知識を注入した。また稲見はこの間に、戦前よりの炭坑マンの多くに私を引き合わせた。アルコールを四、五倍にうすめて飲むことも知った。メチルアルコールを飲んだこともある。当時アルコールを飲んで、あちこちの坑口で死者が出ていた。だが稼働方数に^{あた}応じて与えられる酒の特配は少なく、相変らずメチルアルコールが流行した。診療所の医師達ですら、ガソリンを蒸溜して飲んで、いた。私が持っていた日本薬局方の純粋なアルコールが、如何に貴重なものであったかは、現代の人々にも察しがつこうと言うものだ。

私が労務係になったのは、一九四六（昭和二一）年正月上旬だが、それには、こんないき

さつがある。若い坑内職員がノルマをあげるため、坑員に暴言を吐き、今にもなぐりつけんばかりに叱咤する。聞きかねた私はその職員に向かって語気荒く反論した。理屈に負けた若い職員は、多くの坑員にはやし立てられ赤面して、「お前達を使いきらん。覚えておれ」と捨セリフを残して、坑内から出ていってしまった。当時私達は東京隊と名付けられた三人の先山（経験を重ねた古強者で、探鉱係の信任も厚く、かなりの統率力もあり、卒先して仕事をする）の下に三十人程の新山（新しく入山した者）で一つの切羽（探掘する場所の石炭の壁。探炭現場）に働いていた。その先週末、炭車（ハコ）といって、掘った石炭を入れるトロッコ）の配車が悪く、時間外労働を三時間多くさせられた代償として、その日は早目に作業を止める約束ができていた。にもかかわらず、その職員は先週の約束事など知らぬ顔の半兵衛を決めこみ、一函でも多く出炭し、会社は忠実たらんと、労働者を叱咤したのである。こんな酷使は炭坑では日常茶飯事で、係員にさからうことがどんなわざわいをまねくかは、古い坑員なら身にしみて知っているのも、誰も口答えはしなかった。私はそんな古いしきたりは改むべきであり、労働者の解放は労働者自身が闘い取るべきだという理念を持っていたので、この時それが爆発し、係員に立向ったのである。私は大声で「係員が上がったから我々では切羽の状態がわからん。落ばんでも起きたら大変だ。生命あつての物だねだから、我々

も上がろう」と全員に呼びかけ、職場を放棄し坑外に出てしまった。当然問題となった。

炭坑の生活

炭坑夫の住居は、昔から家と言えるようなものではない。棟割長屋はまだ良い方で、甚だしいのは、柱一本もない間仕切住居だ。ハガキを二つに折って立てたような形で、一本の棟木に両側から斜に板を打ちつけ、壁とも屋根ともつかないものが、地面までとどいているのだが、その屋根の上部三分の一ほどの高さに蝶つがい戸がつけられ、それを下から持ち上げれば、人一人通れる穴が切つてある。天井はひくく、中心棟木の下でも大男は立てない。入口と反対側に明り取り用の小さな硝子のはめこんである。広さはそれでも四畳半はあろうか、隣りとの間仕切りも板である。

こんな薄暗い狭い部屋に、子供連れの夫婦が住んでいた。この住居は一九五〇年頃まで、長崎の某炭坑にあるのを見たことがある。人道無視のこのような家は、占領軍の命令で取りこわされることとなり、炭坑住宅建設に関する特別条例が出来、狭いながら庭付の約十二坪のいわゆる「炭住」が建ち初めた。三畳・四畳半・六畳に炊事場、裏にちょっとした庭があ

る。この炭住が出来あがる都度、家族の多い古参鉾員、しかも坑内夫優先と決められた通達によって入居させた。当時の指令は、何から何まで占領軍——進駐軍と呼ぶのが正しかったが、私はあえて占領軍と書く——さまざまであったのだ。

何処の炭坑でも、一カ月の出炭予定をたて、それを完遂するため、坑内夫一人当りのノルマ（出炭目標）を決め、ノルマ以上に採炭した量を、歩合制の請負給として、坑夫に支払う。だから、一人当りの出炭量を決めることは、労働者の生活の基本となる収入を左右する。後日、労使間の協約が出来るまでは、このノルマを、採炭課職員とボス鉾員の間で取り決めるという非科学的なものであった。私の就労した切羽について例をとると、左の表のようになる。

先山 1人	優先山 2人	後山 27人	計 30人
歩合比率 1人1.3歩 (130%)	1人 1歩 (100%)	0.6歩~0.8歩 (60%~80%)	
固定給 11円	8円と9円	1人4円(1日1方という。8時間)	
ノルマ 1人 2.5ノコ×30人=75ノコ	ボス引1人=0.6ノコに換算		
(当時のノコは1ノコに0.76ノコ入る)			
0.6ノコ×75=45ノコ 45ノコ×30×23方=34.5ノコ (1人1カ月当りノルマ)			

この数字では、採炭夫一カ月一人当り三四・五トンになるが、炭鉾の出炭量は、坑外夫も職員も全部含んで、切羽・坑口の総出炭を割るので、一人当り十トン位となる(当時の吉隈坑は月産二千三百トン)。占領軍からは、常時経営の合理化を図りもっと出炭量を増すために、坑内・坑外の比率を、坑内夫六〇%、坑外夫四〇%までにせよと強硬な指示が出されていたようだ。当時、吉隈坑は五〇・五〇から、配置転換でようやく坑内夫五五%、坑外夫四五%にしたばかりであった。安易な気持で入山した者は、この労働強化に耐えかね、ケツワリ(辞めて行く者)が多く、坑員の出入りは一層激しかった。在籍坑員二千三百人だが、病人及び長欠者を整理すると、常時働いている者は二千人位、それに職員が三百人。これが当時の吉隈坑算定基準の従業員数である。(この炭坑の正式名称は「麻生芳雄鉾業所吉隈坑」。麻生鉾業株式会社の社長は麻生太賀吉、夫人は故吉田茂首相の娘和子。この会社名は、後日麻生が山鹿野金山を手に入れたり、田川の産業セメントや鉄道を買収したりするに至り、麻生産業株式会社と名称が変わると共に、炭坑も芳雄鉾業所吉隈坑となったり、吉隈鉾業所となったりする)

さて新山は、入坑一カ月位は特別増炭しないかぎり歩合給はつかず、一方四円か四円二、三十銭で計算された。しかし独身寮にいた私などは、食費が安く、月のうちに十二、三方も

働けば食うにはまず困らなかった。ただしそれでは首になる。二十三方働くというのが最低限度であった。しかし、その最低限度の地下労働が、どんなに苛酷なものであるか、普通の人には理解できないであろう。一口に言って、空気が悪く三十三度Cという高温の環境で、塩をなめながらの力仕事である。地上に於ける、一カ月間二十二日の労働とは比較にならない、心身の消耗である。

さて、さきの職場放棄の件について、採鉱職員の報告がどんなものであったか知らないが採鉱係長から廻った書類が労務係長の手許へ来て、私は労務課へ呼び出されることになった。労務の係長の前には、私が入山の時書かされた、坑夫名簿というカードが置かれてあった。それには、学歴や職歴の大略を記入してある。鉱夫名簿に私は真実を書いておいた。新聞記者であったこと、大学を出ていること等。しかし、労務係は採用の時に、そんな個人の過去を、一々読みもしない。入山者の数とカード（鉱夫名簿）の枚数が一致すれば、簡単に受け入れた。それほど炭坑は人手が足りなかった。

戦時中使役していた徴用者や朝鮮人、あるいは犯罪を犯した受刑者、戦争による捕虜軍人達が終戦と同時にそれぞれ退山してしまった。特に大部分を占めていた朝鮮人の集団帰国は炭坑を壊滅状態にまで追い込んでいた。その矢先、アメリカ占領軍の至上命令による出炭割

当を確保せねばならない炭坑は、猫の手も借りたい程の時代である。労務係が八方に飛び、鉱員を集めることが先決だった。そんな時だから、私の経歴は鉱夫カードを前にして、はじめて労務係長の目にとまったのである。

労務係長は私に二、三質問した揚句、こんな風なことを言った。「炭坑では、中学卒業以上の人は、鉱夫に使わないことになっている。君も炭坑で働く人ではない。辞めてもらうより外ないなあ」私はこれに答えた。「さっきから、非常時、非常時ということ、日本を復興するために必要な石炭を掘るのだ云々と強調されるが、その石炭採掘のためにやって来た労働者が、中卒以上だから、インテリだから駄目だという理由を聞きたい。私は入山してから、まじめに四十方も働いている。それでも駄目だと言うなら、博多にいる占領軍司令官へその旨申し出て、日本の炭坑主は坑夫をドレイ同様の扱いをしようとしている、と伝える。その結果がどのようになろうと、私の責任ではないから」

この占領軍と言う言葉が効いたのか、私が労務を出ると、労務の職員が後を追って来た。「博多行はちょっと待って下さい。係長が本社へ伺いをたてる間、明日まで」私は内心ほくそ笑んだ。けんかの相手が石炭資本家であり、ひいては国を相手にできる。おかげで一日ゆっくり休養ができた。それは一九四六（昭和二一）年一月十二日であった。

稲見は同室の関係で、労務係長に呼び出され、私のことについて細かく聞かれたらしいが私は入山早々のことであるし、自分の炭坑入りの目的を、まだ稲見にももらしてはいなかったので幸いだった。

翌日、労務課から呼び出しがあり、私を労務係内勤にするということだ。その理由は、都市から色々な思想や経歴を持った人が入山して来る。それに対応できる労務係も必要だからということだ。私も重い足を引きずって斜坑を上下するよりは、内勤事務に替った方が身体が楽であるが、待ってましたとばかりに引受けることは、シャクでもあるので条件を出した。それは、炭坑でノド首といわれる庄風機（坑内へ風を送る機械）を知るために、数日その勤務に着くことだった。そこで、工作課藤島係長の世話で二日間、二坑の庄風機で知識を得た。この庄風機の職場で、玉置峰吉五十歳と知り合った。

労務係へ出勤するようになって、独身寮（栄寮と呼んだ）を出なければならなくなった。というのは、栄寮は坑内夫ばかりの独身寮である。他にいくつも寮はあったが、当時は、毎日のように外勤労務係が、大阪・名古屋・東京から、新参者を集団で連れて来るため、どの寮も満員で、私のように、素直に職員の言葉に従わない者の入れる処はない。労務のエライ

ヤツの取った、一種の報復手段だったかも知れない。

私は困って、この事情を前記の玉置に話した。彼は五人の子供と老母を持っていたが、快く三畳一間を都合つけるから、俺の処へひと先ず来いと言う。地獄で仏とはこんなことを言ったのであろう。私は早速、玉置方に引き移ることにした。玉置の家は、一棟八戸の棟割長屋のうち、二戸分を占有しており、家の中を勝手に改造して、土間であるべき処に床を張り三畳部屋を作っていた。この三畳間は道路に面し、出入口も独立していた。私が入ってから道路側の壁を落とし、硝子窓にしてくれた。

私が労務係になって第一に手がけたのは、新円切替という仕事であった。もう詳細にはおぼえていないが、当時、預貯金は封鎖され、病気とか余程の理由のいかぎり自分の貯金もおろせなくなった。自分の財産について面倒な申告などもあり、字の書けない者や、手続に不慣れな者など、困っている労働者が多いのを見かねた私は、古新聞紙に下記のような事を書いて、そこら中に張りまわった。

『個人の秘密は守るから、遠慮なく来てください。代筆、手続をしてあげます』

それから当分の間は夜昼なく筆耕であった。私は労務係になってから、鉱員の福祉関係を受持ったが、自分から仕事を探し、鉱員や家族の相談相手になり、常に労働者の味方になる

うと努力した。文字の書けない人の代筆、無知な親と時代感覚の差が生む、親子げんかの仲裁もした。自分を売り込むためにしたわけではなく、全く自分の性格のしからしむるところだったが、私の人気が上がれば上がるだけ、同僚の中に憎しみを持つ者ができてきた。

終戦後もまだ半年そこそこの労務係は、戦前の気風そのままで、炭坑ではこわい者なしの存在である。その労務係を締めくくりするのは、課長でも係長でもない。平塚という六十歳を越した馬車屋の親方である。この人の娘婿やお声掛りが、労務の外勤として鉦員の繰込み（毎日、坑内へ入れる人員を確保する仕事）を司どる。事務的な労務係は女子三名、男子四名、男の中に係長と主任がいる。課長は本社詰めで、月二回ほど坑口へ来る。私が労務係になってから、復員職員がボツボツ増し、二坑弥栄坑に労務係内勤をおくようになったが、それまでは外勤労務係がどの坑口でも勝手放題なことをやり、善良な坑員一家は、ずい分泣かされたものらしい。